

状態の「成立」と「存在」

「～になる」と「～である」

小坂 光一

1. 動作動詞句と状態動詞句

これまでは多くの場合、動詞(句)はアスペクトの観点から「状態動詞(句)」と「動作動詞(句)」に分類され、さらに、動作動詞(句)に「テイル」を付加したものは「継続相」と呼ばれてきた。例えば、「論文を書く」のような動詞(句)は「動作動詞(句)」であり、これに「テイル」を付加した動詞(句)、すなわち「論文を書いている」のような動詞(句)は「継続相」ということになる。そして、この「継続相」は様々な点において状態動詞(句)の様相を帯びてくる。

動作動詞(句)と状態動詞(句)の違いは多々あるが、ここでは次の2点をあげておきたい。

- 1) 被観察時(Betrachtzeit、以下 BZ と記す)¹を語彙的に明示しない場合、動作動詞(句)の「u-形」(現在形)²は発話時(Sprechzeit、以下 SZ と記す)以後の事象を表すが、状態動詞(句)の場合は SZ(発話時)とオーバーラップする Zeitintervall(時線)³における状態を表す。

¹ 発話時、被観察時、行為時、評価基準時などの概念は Bäuerle(1979)に基づいている。詳しくは例えば小坂(2002)の第1章、特に S. 21-24 を参照。

² 一般的には「ル形」と呼ばれるものであるが、(例えば「行く」、「買う」、「立つ」などのように)「ル形」が必ずしも「ル」で終わるわけではなく、共通しているのは「u」だけなので、より一般化するために「u-形」と呼ぶことにする。なお、「u-形」は「i-形」や「da-形」と共に「ta-形」と対立する概念でもある。

³ 「時線」という語は一般的に使用されている語ではなく、私の造語である。„Zeitintervall“ は字義的には「時間」であると思われるが、「時間」はすでに „Zeit“ (「時」)に相当する語として定着してしまっている。それであえて、「時点」に対応させて「時線」とした。

小坂光一

- (1) 彼は図書館に行く。(SZ 以後の事象) (「図書館に行く」= 動作動詞句)
- (2) 彼は英語がよくできる。(SZ とオーバーラップする Zeitintervall(時線) における事象) (「英語がよくできる」= 状態動詞句)

2) 2つ(以上)の文が連続する場合、両者に動作動詞(句)が使われていれば、事象が時間的に前後していることを表す。

- (3) 彼は図書館に行く。(そして)文献を調べる。(「図書館に行く」が先、「文献を調べる」が後に生じる)

一方もしくは両者に状態動詞句が使われている場合は2つの事象は時間的にオーバーラップする。

- (4) 彼は英語がよくできる。図書館で英語の文献を読む。(「英語がよくできる」(状態動詞句)の一部と「図書館で文献を読む」(動作動詞句)が時間的にオーバーラップする。ただし、「英語がよくできる」の「u-形」はSZともオーバーラップするが、「図書館で文献を読む」(動作動詞句)の「u-形」はSZとはオーバーラップしない)
- (5) 彼は英語がよくできる。ロシア語もかなりできる。(「英語がよくできる」(状態動詞句)と「ロシア語もかなりできる」(状態動詞句)が時間的にオーバーラップする。さらに、「u-形」の場合は両方ともSZとオーバーラップする)

この観点から見ると、「継続相」としての「テイル」形(すなわち、従来の言い方で『進行中』を表す『テイル』と『結果状態』を表す『テイル』)はまさしく状態動詞句の性質を持っていると言える。

- (6) 彼は起きている。(「結果状態」を表す。現在形⁴の場合はその「結果状態」がSZとオーバーラップする)

なお、後に出てくる „Zeitpunkt“ は「点」としての「時」を意味するので、「時点」で問題なからう。

⁴ 「ている」も「u-形」であることに変わりがないが、「ている」形以外の「u-形」と区別するために、「現在形」という語を用いる。また、状態動詞句には「u-形」の他に「i-形」、「da-形」もある。これらにはもちろん「u-形」という表現を用いることはできない。「u-形」、「i-形」、「da-形」を包括する表現としては「非過去形」あるいは「非 ta-形」が相応しいかもしれない。

- (7) 彼は起きている。英語の文献を読んでいる。(「起きている」(「結果状態」)(と「英語の文献を読んでいる」(「進行状態」)がオーバーラップする。さらに、現在形の場合は両方ともSZともオーバーラップする)
- (8) 雨が降っている。太郎は部屋で本を読んでいる。((「雨が降っている」(「進行状態」)と「本を読んでいる」(「進行状態」)がオーバーラップし、現在形の場合は両方ともSZともオーバーラップする)

(6)、(7)の「起きている」はいわゆる「結果状態」と呼ばれるものであり、「状態表現」と解釈することに抵抗はなかろう。問題は(8)の「(雨が)降っている」と「本を読んでいる」である。これはいわゆる「進行形」と言われる「テイル」である。換言すれば、ある「動作・現象」をまるごと観察するのではなく、その一部分を切り取って観察した場合の表現である。例えば、「(雨が)降っている」は雨が降り始めた後から雨が止むまでの間の一部分を切り取って、その部分をBZ(被観察時)にし、かつそのBZ(被観察時)がSZ(発話時)を含むZeitintervall(時線)である場合の表現である。また「本を読んでいる」は本を読み始めてから読み終わる、もしくは読むことを中止するまでの間の部分を切り取ってBZ(被観察時)にし、かつそのBZ(被観察時)がSZ(発話時)を含むZeitintervall(時線)である場合の表現である。何ゆえに、動作動詞句で表現される「動作・現象」の一部分を切り取ったものが、動作動詞句の性質を失って、状態動詞句の性質を有するに至るのであるだろうか。確かに、「起きている」などは状態表現だと言うことはできる。また、「本を読んでいる」なども「状態表現」だと言えないことはない。だが、「本を読んでいる」などが「(進行中の)動作」だと言うこともできる。

2. 動作/現象/状態/命題の「存在」

上述の逆の現象もある。すなわち、「状態」の開始の表現はいわゆる「動作動詞句」の性質を有する。

- (1) 彼はロシア語ができる。(「ロシア語ができる」という状態は「u-形」の場合)SZと重なる)
- (2) 彼はロシア語ができるようになる。(「u-形」で表される「ロシア語が

小坂光一

できる」という状態は SZ 以降における状態である。また、その状態に「なる」のも SZ 以降の事象である)

小坂(2002)では「静的(statisch)」と「動的(dynamisch)」、及び「成立(Entstehung)」と「存在(Existenz)」という対概念を導入した。要約して言えば、動作/状態/命題などの「存在」は「静的(statisch)」であり、動作/状態などの「開始(発生)」や「成立」は「動的(dynamisch)」である、という考え方である。そして、「テイル」を次の4つに分類した。この分類においては「テイル」形はすべて「存在」と関係している。

「～ている1」「事象開始後における事象(過程)の BZ(被観察時)における存在」
事象開始後における「事象(過程)」が、BZ(被観察時)において存在することを表す。

(3) 次郎は今、プールで泳いでいる。(「次郎がプールで泳ぐ」という事象が「今」という BZ において存在する)

「～ている2」「事象成立後の主体の状態の BZ(被観察時)における存在」
事象の成立後における「主体(主語)の状態」が、BZ(被観察時)において存在することを表す。

(4) 三郎は今、東京に行っている。
(「三郎が東京へ行く」という事象が成立した後の状態「三郎が東京にいる」が「今」という BZ において存在する)

「～ている3」「『タ形』で表される命題の評価基準時(Evaluationszeit、以下 EZ と記す)における存在」
事象が成立したという事実(成立した命題内容を持つ命題 = タ形で表される命題)が、EZ(評価基準時)において存在することを表す。

(5) 花子はもう手紙を書いている。
(「花子がもう手紙を書いた」という命題が EZ(この例の場合は「今」という SZ と重なる)において存在する)

「～ている4」「『タ形』で表される命題の SZ(発話時)における存在」

事象が成立したという事実(成立した命題内容を持つ命題 = タ形で表される命題)が、SZ(発話時)において存在することを表す。

- (6) 三郎は先月も東京へ行っている。
(「三郎が東京へ行った」という命題がSZ(=「今」)において存在する)

これら4つの「テイル」形のうち、「テイル1」は動作/事象の存在、「テイル2」は(主格で表される主体の)状態の存在を表す。本稿のテーマは「状態」の「成立と存在」なので、主として「テイル1」と「テイル2」を扱うことになる。

「動作/現象」であるか「状態」であるか、「動的(dynamisch)」であるか「静的(statisch)」であるかの関係は「成立」と「存在」の観点から以下のようにまとめることができる。

- 1) 動作/現象/状態の「開始(発生)/成立」は動的(dynamisch)な性質を有する。⁵
- 2) 動作/現象/状態の「存在」は静的(statisch)な性質を有する。

そしてさらに、

動作/現象の一部分を切り取って表現する「～ている1」が静的(statisch)な性質を帯び、あたかも状態動詞句であるかのように見えるのは、「～ている1」が動作/現象の「開始(発生)」や「成立」の表現ではなく、動作/現象の「存在」を表すからである

のように説明することができる。

3. 「存在」の「発生と存在」(1)

「動作/現象」の存在は「テイル1」で表現され(得)る。そして、「テイル1」の直前の動詞句は継続的・動的(durativ-dynamisch)な動詞句である。さらに、「動作/現象」の存在の「発生」は動作/現象の「開始」と重なる。⁶

⁵ 動作/現象の「開始(発生)」と「成立」の(時間的な)関係は動詞句の種類によって異なる。詳しくは小坂(2002)の第1章(主としてS. 31-32)参照。

⁶ 「始まり」の一点(起点)の表現として、動的(dynamisch)なものには「開始」という語を用いて

小坂光一

- (1) 次郎は今、プールで泳いでいる。
(「次郎がプールで泳ぐ」という事象の「今」という BZ における存在)
- (2) 次郎はプールで泳ぎ始める。
(「次郎がプールで泳ぐ」という「動作/現象」の開始の表現であるが、
「次郎がプールで泳いでいる」という「動作/現象の存在」の発生をも表現している)

「テイル1」の場合と異なって、「テイル2」で表現される「結果状態」の「発生」もしくは「結果状態」の「存在の発生」は「～始める」で表されることができない。これは、「テイル2」が「動作/現象の存在」を表すのではなく、「状態の存在」を表すからだと考えることができる。

- (3) 三郎は今、東京に行っている。
- (4) *三郎は東京に行き始める。

このように、動的(dynamisch)な動詞句であっても、点的(punktuell)なものには「～始める」を付加することができないが、一般的に言って、すでに「存在」を表すもの(静的な性質を有する動詞句)にも「～始める」を付加することができない。

- (5) *次郎はプールで泳いでい始める。
- (6) *三郎は東京に行ってい始める。

状態動詞句で表される「状態」表現というものは「存在」表現なので、通常は「～始める」を付加することができない。しかし、これは「状態の発生」の表現ができないという意味ではない。「状態の発生」は「～始める」の付加以外の様々な方法で表現される。以下、動詞句の種類ごとにまとめてみる。

きたが、静的(statisch)なもの、すなわち「存在」の起点の場合は「発生」の方が適切のように思われるので、状態の「存在」(=静的)の起点に対しては「発生」を用いることにする。状態動詞句はすべて非完了的(imperfektiv)なので、「発生」すれば「成立」する。従って、状態動詞句の場合、「発生」は「成立」と同義であると言える。なお、動作・現象の「存在」(「～ている1」)の起点に対しては引き続き「開始」を用いる。

状態の発生と存在の場合

VPの種類	状態(の存在)の発生		発生後の状態(の存在)
点的・静的(punktuekk-statisch)な「状態動詞句」 ⁷			
-i VP	～くなった	-	-i
欲しい	欲しくなった		欲しい
飲みたい	飲みたくなった		飲みたい
美しい	美しくなった		美しい
継続的・静的(durativ-statisch)な「状態動詞句」			
-u VP	～ようになった		-u
できる	できるようになった		できる
話せる	話せるようになった		話せる
-da-VP	～になった		～だ
静かだ	静かになった		静かだ
「～ている2」(点的・動的な動詞句から派生)			
Typ 1			
-u VP	～た		～ている2
来る	来た		来ている
壊れる	壊れた		壊れている
Typ 2			
-u VP	～た		(～ている2) ⁸
死ぬ	死んだ		(死んでいる)
到着する	到着した		(到着している)
Typ 3			
-u VP	(～た)		～ている2
そびえる	(そびえた)		そびえている
優れる	(優れた)		優れている

⁷ 日本語の「状態動詞句」を「点的(punktuell)」と「継続的(durativ)」に分けた理由等に関しては Kotosaka(1991)及び小坂(1992)の第8章参照。

⁸ のTyp 2から「～ている2」形が成立しにくい理由、及び成立するための条件などに関しては小坂(1996)及び小坂(2002)の第2章参照。

小坂光一

動作の開始と存在の場合

VPの種類	動作(の存在)の開始	開始後の動作の存在
「~ている1」(継続的・動的な動詞句から派生)		
-u VP	~始めた	~ている1
勉強する	勉強し始めた	勉強している
論文を書く	論文を書き始めた	論文を書いている

4. 「存在」の「発生と存在」(2)

第3章で述べたのは「存在」の「発生」と「存在そのもの」の基本的な関係であるが、動詞句に補足語などが付加されることにより、基本的関係とは異なった関係が生じることがある。

- (1) 彼は今教壇に立っている。
- (2) 私の前に立つな！
- (3) 目の前に高い山がそびえている。

(1)の「立っている」は単独の「立つ」(点的・動的)が成立した結果の「状態」ではない。すなわち、「座っている」もしくは「寝ている」のような、いわゆる「立っていない」状態から変化した結果ではない。また、(2)の「立つな」は「座れ」を意味しているわけではない。ここでは、「教壇に」、「私の前に」のような補足語が加わったために、「成立」と「存在」の関係が基本的なものとは別のものになっている。具体的に言えば、(1)は「教壇に立っていない」状態からの変化の結果を表現したものである。従って、「教壇に立っている」の「発生」は「教壇に立つようになる」もしくは「教壇に立っているようになる」である。

VPの種類	状態(の存在)の発生	発生後の状態の存在
-u VP	~(ている)ようになった	~ている2
教壇に立つ	教壇に立つ(ている)ようになった	教壇に立っている

また、(2)の「私の前に立つな」は、分析的な言い方をするならば、「私の前に立っているな」である。そしてこれは「私の前に立った状態で存在する」ことを禁止しているのであり、「どこか(私の前以外の)他の場所に立っている」ことまで禁止して

いるわけではない。この関係は次のように示すことができよう。

VPの種類	状態(の存在)の発生	発生後の状態の存在
-u VP	~ているようになった	~ている ²
私の前に立つ	私の前に立っているようになった	私の前に立っている

(1)や(2)で用いられている「立つ」の意味は従って「座る」もしくは「横になる」に
対立する「立ち上がる」や「起き上がる」の意味ではなく、「(～に)立っている状態
になる」の意味である。⁹

(3)の「そびえる」に関しても同じことが言える。

- (3a) 目の前に高い山がそびえた。
(3) 目の前に高い山がそびえている。

(3a)の意味するところは「[目の前に高い山がそびえている]という状態になっ
た」こと、すなわち「状態の発生」であり、「そびえる」という「動作・現象」の「成立」
ではない。よって、これは「～ているようになった」のパターンである。

ここでは主として「立つ」を例にして状態の「発生」について述べている訳である
が、状態の「発生と存在」の観点から見た場合、「立つ」と「立っている」の関係には
次の2種類があると考えられる。

- 「立つ」=「立っている」の発生(「立ち上がる」、「起き上がる」の成立)
「～に立つ」=「～に立っている」の発生(「[～に立っている]ようになる」の成
立)

すでに小坂(2002)などで論じたように、継続的・動的・非完了的(durativ-dyna-
misch-imperfektiv)な動詞句の場合は「開始」が「成立」を意味するが、継続的・動的・

⁹ ついでながら、「立つ」には別のヴァリエーションもある。それは「立っている」の「保持」を意味するパターンである。

今日は午前中2時間教壇に立つ。

「立つ」それ自体は点的・動的(punktuell-dynamisch)な動詞句であるから、「午前中」や「2時
間」のような「継続」を表す語句とは共起しないはずである。上の場合は「[教壇に立っている]
状態を2時間の間保持する」が意味されている。もっとも、「午前中2時間教壇に立ってい
る」という状態の「開始(発生)」と解釈することも可能であろう。後者の場合は「～よくなる」
のパターンである。

小坂光一

完了的(durativ-dynamisch-perfektiv)な動詞句の場合は動作・現象の「開始」は「成立」を意味しない。しかし、「存在」表現は完了的(perfektiv)でないので、「存在の発生」は即「存在の成立」を意味する。

- (4) 彼は博士論文を書く。
- (4a) 彼は博士論文を書き始めた。
- (4b) 彼は今博士論文を書いている。

動詞句「博士論文を書く」は継続的・動的・完了的(durativ-dynamisch-perfektiv)である。従って「博士論文を書き始めた」は「博士論文を書く」という動作の「開始」と「博士論文を書いている」(という「動作の存在」)の「発生」を同時に表現している。換言すれば、「博士論文を書き始めた」だけでは、「博士論文を書く」という動作はまだ「成立」していないが、「博士論文を書いている」という「動作の存在」はすでに「発生」し、「成立」している。

動的(dynamisch)な動詞句には 完了的(perfektiv)なものとは非完了的(imperfektiv)なものがあるため、このように「開始」、「発生」、「存在」、「成立」の関係が複雑になるが、静的(statisch)な動詞句は常に非完了的(imperfektiv)なので、次のように言うことができよう。

状態の「発生」は状態の「成立」意味する。そして、状態の「発生・成立」は状態の「存在」を内包する。

次章ではこの「内包」について考察する。

5 . 内包による状態表現

以上において、状態(の「存在」)の「発生」表現のパターンについて述べた。日本語には状態の「存在」を表すのに、「存在」表現の形式ではなく、「発生」表現の形式を用いるという現象が目立つ。

- (1a) 疲れたなあ。(「[今疲れている]が発生した」「今疲れている」の意)
- (2a) お腹がすいた。(「[今お腹がすいている]が発生した」「今お腹がす

いている」の意)

(3a) 私の前に立つな。(「[私の前に立っている]を発生させるな」「私の前で立っているな」の意)

(4a) 彼はドイツ語が話せるようになった。(「[ドイツ語が話せる]が発生した」「彼は今ドイツ語が話せる」の意)

ドイツ語では状態(の「存在」)を表現するのに大抵の場合に静的(statisch)な動詞句(状態動詞句)が用いられる。状態の「存在」を表現するのに状態の「発生」に言及する必要性は必ずしもない訳であるから、状態動詞句が用いられるのはむしろ自然であると言える。すなわち、上の(1a)~(4a)に該当するドイツ語の自然な表現は以下の通りであり、ここではすべてにおいて静的(statisch)な動詞句が用いられている。¹⁰

(1b) Ach, ich bin total müde.

(2b) Ich habe Hunger.

(3b) Stehen Sie nicht vor mir!

(4b) Er kann schon Deutsch sprechen.

状態が「発生」したということはその後の一定の Zeitintervall(時線)において状態が「存在」することを内包するし、また多くの場合は逆に、状態が「存在」するということが、それ以前のある Zeitpunkt(時点)において状態が「発生」したことを内包する。換言すれば、「状態の発生」は「状態の存在」を「内包」するし、「状態の存在」は多くの場合「状態の発生」を内包する。その意味において、コンテキストによっては「状態の発生」と「状態の存在」の間には語用論的な互換性がある。私は日本語に見られるような、「(状態の)発生表現」による「(状態の)存在表現」を「内包によ

¹⁰ 実は、本論考の出発点となったのはボーデン湖上(ドイツ、コンスタンツ)で行われた豪華な花火大会である。数人のおばあさん達が花火開始の何時間も前に、ボーデン湖に密接した位置にボーデン湖側に向けて設置されてあるベンチを確保していた。このベンチは、いわば花火見物の「特等席」であった。彼女たちの前面には誰も存在し得ないはずであった。ところが、花火が始まるや否や、若者たちがどやどややって来て、このおばあさん達の前に「立った」のである。そこで怒ったおばあさんの1人が言ったせりふが、

(3b) Stehen Sie nicht vor mir! (「私の前に立つな!」逐語訳:「私の前で立っているな!」)

であった。

小坂光一

る状態表現」と呼びたい。

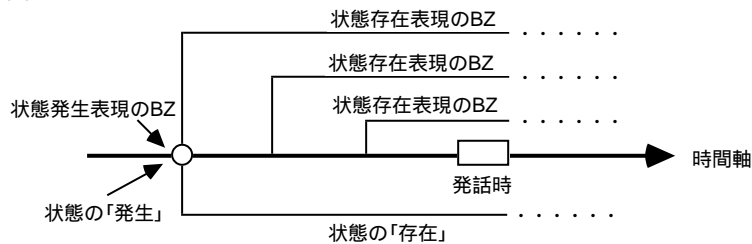
しかし、「状態の発生」と「状態の存在」の間に語用論的互換性がある場合でも、言語的に「等価」である訳ではない。両者の間には明らかに BZ(被観察時)の相違がある。

- (5) 私は疲れた。
- (6) 私は今疲れている。
- (5a) *私は今疲れた。
- (6a) 私は今疲れている。

(5)と(6)の間には多くの場合、語用論的互換性があるが、(5a)と(6a)の比較からわかるように、両者に同じ BZ(被観察時)を設定すれば互換性はなくなる。簡単に言えば、当然のことながら、「状態の発生」の BZ(被観察時)は「状態の存在」の BZ(被観察時)より時間的に前でなければならない。

「発生」は「存在」の起点であるから、「存在」の BZ(被観察時)の起点も「発生」の BZ(被観察時)に連続し得る。しかし、「発生」の BZ(被観察時)に連続した Zeitintervall(時線)の一部分を切り取って「存在」の BZ(被観察時)とすることもできる。状態の「存在」を表す動詞句が「現在形」の場合を例にして図示すれば以下のようになる。

図 1



「発生」の BZ(被観察時)と「存在」の BZ(被観察時)の間にいかなる関係があれば内包による存在表現が可能になるであろうか。次の例を見てみよう。

- (7) (「道路上における財布の存在」を発見して)

(7a) * あ、財布が落ちた。

(7b) あ、財布が落ちている。

状態の「発生」(「財布が落ちる」)の BZ(被観察時) : 不明

状態「存在」の BZ(被観察時) : SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)

状態の「発生」の BZ と状態の「存在」の BZ(被観察時)の関係 : 不連続

(8) (「道路上における財布の存在」の「発生」直後)

(8a) あ、財布が落ちた。

(8b) * あ、財布が落ちている。

状態の「発生」(「財布が落ちる」)の BZ(被観察時) : SZ(発話時)の直前

状態「存在」の BZ(被観察時) : 「発生」の BZ(被観察時)に連続し、かつ、

SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)

状態の「発生」の BZ と状態の「存在」の BZ(被観察時)の関係 : 連続

(9a) 祖父は50年前に死んだ。

(9b) * 祖父は50年前から死んでいる。

(9c) * 祖父は今死んでいる。

状態の「発生」(「祖父が死ぬ」)の BZ(被観察時) : SZ(発話時)の50年前

状態「存在」の BZ(被観察時) : SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)

状態の「発生」の BZ と状態の「存在」の BZ(被観察時)の関係 : (9b)の
場合は連続、(9c)の場合は0(連続) ~ 50年の隔たり

(10a) うちの犬はたった今死んだ。

(10b) * うちの犬は今死んでいる。

状態の「発生」(「うちの犬が死ぬ」)の BZ(被観察時) : SZ(発話時)の直前

状態「存在」の BZ(被観察時) : SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)

状態の「発生」の BZ と状態の「存在」の BZ(被観察時)の関係 : 連続な
いは短い時間距離

(11) (路上に死体の「存在」を発見して)

(11a) * あ、人が死んだ。

(11b) あ、人が死んでいる。

小坂光一

状態の「発生」(「人が死ぬ」)の BZ(被観察時)：不明
状態「存在」の BZ(被観察時)：SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)
状態の「発生」の BZ と状態の「存在」の BZ(被観察時)の関係：不連続

(12a) 腹が減った。

(12b) 腹が減っている。

状態の「発生」(「腹が減る」)の BZ(被観察時)：不明¹¹
状態「存在」の BZ(被観察時)：SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)
状態の「発生」の BZ と状態の「存在」の BZ(被観察時)の関係：連続

これらは、「発生」と「存在」という観点ではいずれも時間的に次のような関係になっている。

VPの種類	状態(の存在)の発生	発生後の状態の存在
-u VP	～た	～ている ²
落ちる	落ちた	落ちている
死ぬ	死んだ	(死んでいる)
(腹が)減る	(腹が)減った	(腹が)減っている

(7)の場合、「発生」の BZ(被観察時)は不明であるが、「存在」の BZ(被観察時)は明らかである。すなわち、「存在」の BZ(被観察時)は SZ(発話時)を含む Zeitintervall(時線)である。2つの BZ(被観察時)間の距離は不明であるが、連続しないと考える方が妥当であろう(物理的な時間はもちろん連続する)。

一方、(8)の場合は「発生」の BZ(被観察時)も「存在」の BZ(被観察時)も明らかである。すなわち、「発生」の BZ(被観察時)は SZ(発話時)の直前であり、「存在」の BZ(被観察時)は SZ(発話時)を含む Zeitintervall である。2つの BZ(被観察時)は連続する。

(9)の場合は「発生」の BZ(被観察時)も「存在」の BZ(被観察時)も明示されているのに(9b)は不自然である。この例の場合は2つの BZ(被観察時)間の関係にもかなりの多様性が考えられる。「存在」表現(10b)の BZ(被観察時)と「発生」表現(10a)の BZ(被観察時)は連続しているか、あるいは切り離されてとしても両者の間の時間距離は短い。いずれの場合も「死んでいる」という「存在」表現は不自然になる。¹²

¹¹ 「発生」の BZ(被観察時)については後述する。

(11a)のBZ(被観察時)は不明で、(11b)のBZ(被観察時)(= SZを含む Zeitintervall = 「今」)は「発生」のBZ(被観察時)とは切り離されている。

(7)～(11)を見る限りでは次のように言えそうである。

「発生」表現の BZ(被観察時)が不明で、「存在」表現の BZ(被観察時)のみが明らかかな場合は「存在」表現が優先される。

「発生」の BZ(被観察時)が明らかかな場合は「発生」表現が優先される。

しかし、(12)や(5)を加えて考察するならば、ことがらはそう単純ではない。すなわち、「発生」のBZ(被観察時)は不明であるが、「発生」のBZ(被観察時)と「存在」の BZ(被観察時)(= SZ を含む Zeitintervall = 「今」)が連続することが可能である(切り離すこともできる)。そして、「発生」表現が「存在」表現の代替として使用できる。

また、このような(肉体的・精神的状態を意味する)動詞句の場合、主体(主語)が変わると「発生」表現が不自然になるということも考慮する必要がある。

(5b) *彼女は疲れた。

(6b) 彼女は今疲れている。

(12c) *あいつは腹が減った。

(12d) あいつは今腹が減っている。

「疲れている」、「腹が減っている」の BZ(被観察時)は上例の場合はSZ(発話時)と重なる Zeitintervall(時線)であるが、「疲れた」や「腹が減った」のような「発生」の BZ(被観察時)は時間的に特定できる性質のものではない。あえて言えば状態の「発生」の BZ(被観察時)というのは主体(主語)が「疲れている」、「腹が減っている」という状態の「存在」を感じ取った Zeitpunkt(時点)であろう。「感じ取る」という「発生」は内面的現象であるから、(疑問文ではなく)叙述文である限り、状態の所有者(=主体)は話者本人でなければならない。(5b)や(12c)のような「発生」表現が許容されにくい理由はこの点にあると思われる。そして、その意味で、「状態の発生」

¹² 本稿第3章で行った分類における「～ている2」(点的・動的な動詞句から派生の) Typ 2 から「～ている2」形が作りにくい理由に関しては小坂(1996)及び小坂(2002)の第2章において「単方向性」と「双方向性」の観点から論じた。

小坂光一

が「内包」する「状態の存在」というのは Kosaka(1991)、小坂(1992)、小坂(1999)などで論じた点的(punktuell)な状態(瞬間状態)に通じるものを感じられる。

問題はもう1つある。それは、いつの Zeitpunkt(時点)を状態(の「存在」)の「発生」とみなすかである。今、(5)と(12)に関して、「発生」の BZ(被観察時)を「状態の『存在』を感じ取った Zeitpunkt(時点)」とした。そうであれば、(7)の「発生」の BZ(被観察時)は「道路上における財布の『存在』を発見した Zeitpunkt(時点)であり、(11)の「発生」の BZ(被観察時)は「死体の『存在』を発見した Zeitpunkt(時点)」であると言うこともできる。より一般化して言えば、「状態の『存在』を認識した Zeitpunkt(時点)」が「発生」の BZ(被観察時)であるとも言える。

そのように考えた場合、(7)や(11)における状態「発生」の BZ(被観察時)はもはや「不明」ではなくなり、かつ両 BZ(被観察時)が連続しているか、あるいは連続しない場合でも、両者の距離は極めて短くなる。そして、そこから生じる新たな問題として、「状態が実際に発生した Zeitpunkt(時点)」を「状態の発生」と見る場合と「状態を認識した Zeitpunkt(時点)」を「状態の発生」と見る場合の相違を考察する必要が生じる。

ここまでの観察の限りでは、「状態の『存在』を認識した Zeitpunkt(時点)」を「発生」の BZ(被観察時)とするケースというのは、「疲れる」、「腹が減る」のような肉体的・精神的状態の発生に制限される方がいいように思われる。まとめると以下のようなになる。

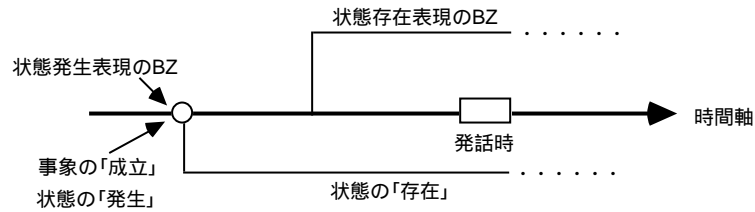
肉体的・精神的状態の「発生」時というのは、物理的な発生時ではなく、その状態を認識したときである。この種の「発生」表現には人称制限がある。

状態の「存在」が状態の「発生」から切り離して観察されている場合、すなわち、「存在」表現の BZ(被観察時)が「発生」表現の BZ(被観察時)に連続しない場合は「存在」表現が優先される(図2参照)。

(7b) あ、財布が落ちている。

(12b) 腹が減っている。

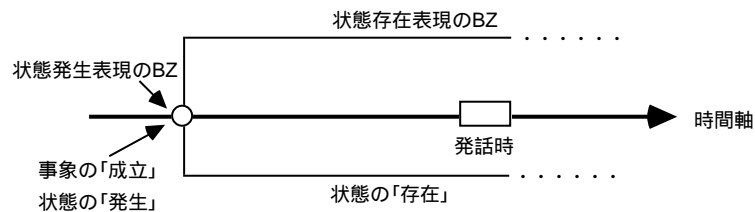
図 2



状態の「発生」と状態の「存在」を連続したものとして観察した場合、すなわち、「存在」表現の BZ(被観察時)が「発生」表現の BZ(被観察時)に連続する場合は、「発生」表現を用いて、それに内包される「状態」を表現することができる(図 3 参照)。

- (5) 私は疲れた。
- (12a) 腹が減った。

図 3

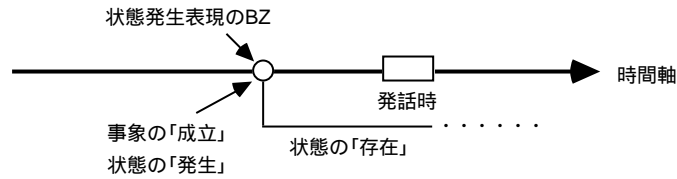


「死ぬ」、「到着する」のような「単方向性」動作・現象の場合は別の基準が適用される(小坂(1996)及び小坂(2002)の第 2 章参照)。

(状態の「発生」や状態の「存在」ではなく)動作・現象の「成立」に重点を置いた表現では「存在」表現は用いられない。

- (8a) あ、財布が落ちた。

図 4



本稿の最後の例として次のパターンを考えてみよう。

- (13a) A君はドイツ語が話せるようになった。
- (13b) A君はドイツ語が話せる。
- (13c) A君はドイツ語が話せなくなった。
- (13d) A君はドイツ語が話せない。

- (14a) タバコが吸いたくなった。
- (14b) タバコが吸いたい。

これらはそれぞれ、以下のような関係になっている。

VPの種類	状態(の存在)の発生		発生後の状態(の存在)
-i VP	~くなった	-	-i
-u VP	~ようになった		-u

これらの例においても上記、
、
が当てはまる。すなわち、
に該当する場合は(13b)、(13d)、(14b)が用いられるし、
や
に該当する場合は(13a)、(13c)、(14a)が用いられる。そしてさらに、(14a)には、(肉体的・精神的現象であるため)も適用される。
はこれらの例には無関係である。

状態の「発生」のBZ(被観察時)が確定でき、かつ、状態の「存在」のBZ(被観察時)との間に距離がある場合は、「発生」がそれに続く状態の「存在」を「内包」しているとしても、「発生」表現は(内包された状態の「存在」の表現というよりは)むしろ状態「発生」もしくは動作・現象の「成立」を markieren(マーク)した表現であると言うべきであろう。「内包」された状態の「存在」の表現として状態の「発生」表現が使用されるのは、「存在」表現のBZ(被観察時)が「発生」のBZ(被観察時)まで及んでいる場合であると考えられる。そしてさらに、この「状態発生」の表現は、「発生」後に存

在する状態が「発生」以前には存在しなかったことを markieren(マーク)している。

13

最後に、図3における状態表現のBZ(被観察時)の長さに関して少しく触れておきたい。それは、状態発生表現のBZ(被観察時)が明示されていない場合は、状態表現のBZ(被観察時)が比較的短くなければならない、ということである。

(15) A君はドイツ語が話せるかなあ。

(15a) うん、話せるようになったよ。

(15b) うん、話せるよ。

「話せる」の発生が「10年前」であり、発生からSZ(発話時)までの「10年」が「長いZeitintervall(時線)であると認識されている場合は、(15a)は不自然である。(15a)が自然な文であると感じられるのは、「話せる」の発生が比較的最近のことであると認識された場合である。

一方、状態発生表現のBZ(被観察時)が明示されれば、この制限はなくなる。次の(15c)、(15d)では状態発生がSZ(発話時)から離れたものと認識されているし、(15e)では状態発生とSZ(発話時)の距離が短いものと認識されている。

(15) A君はドイツ語が話せるかなあ。

(15c) うん、彼は、10年前留学した時に話せるようになった。

(15d) うん、彼は、もう10年も前に話せるようになった。

(15e) うん、彼は、10年ぐらい前にやっと話せるようになった。

もっとも、(15c)、(15d)、(15e)が図3に該当するタイプなのか図4に該当するタイプなのかは判然としない。状態発生表現のBZ(被観察時)が明示された場合は自

¹³ 否定文の場合は、「変化後に非存在となった状態が変化以前には存在した」と解釈することもできる。すなわち、(13c)、(13d)を例にとるならば

「ドイツ語が話せない」という状態が発生した。発生後は「話せない」という状態が存在する

「ドイツ語が話せる」という状態が存在しなくなった。発生後は「話せる」という状態が存在しない

の2通りの解釈が考えられる。本稿では の立場をとっている。その方が説明力が大きいと思われるからである。

然と図4のタイプに移行することになるとも考えられる。

いずれにせよ、日本語では何故に「状態の発生」を表現するという手段を用いて、それに内包される「状態の存在」を表現する傾向が強いのか、などに関する詳しい考察は今後の大きな課題である。

引用文献

- Bäuerle, R. (1979): *Temporale Deixis, temporale Frage: zum propositionalen Gehalt deklarativer und interrogativer Sätze* (=Ergebnisse und Methoden moderner Sprachwissenschaft Bd. 5), Tübingen
- Kosaka, K. (1991): „Statische Verbalphrasen im Deutschen und im Japanischen“, in *Akten des VIII. Kongresses der IVG*, München
- 小坂光一 (1992): 『応用言語科学としての日独語対照研究』、東京
- 小坂光一 (1996): 「単方向性と双方向性」、名古屋大学言語文化研究会編 『ことばの科学』 第9号
- 小坂光一 (1999): 「意志の客観的描写としての『(よ)うとしている』」、名古屋大学言語文化研究会編 『ことばの科学』 第12号
- 小坂光一 (2002): 『「成立」と「存在」』、東京